
放課後

ヤマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後

【Nコード】

N4641F

【作者名】

ヤマダ

【あらすじ】

放課後のワンシーンです。クールな委員長の突然の行動の真意とは。掌編です楽しんでください。

委員長は二重の三白眼を大きく見開いている。狼のような目だ。肉付きの薄い両手でボクの両頬を撫でていた。

「これが答えだよ」

はつきりとした強い声だった。委員長が薄い唇をそっと押し当てる。委員長の唇って柔らかい。頭の中が纏まらない中でボクが感じたこと、鼻で呼吸をしながら、瞬きすることも出来ないでいた。

柔らかく、濡れたものがボクの唇に触れた。委員長の舌、反射的に両手で委員長の肩を持ち軽く押す。顔を仰け、委員長から顔を離した。

西日の差し込む教室に、湿り気を帯びた生温かい風が吹き込んだ。練習をする野球部の掛け声やブラスバンド部のトランペットの音が響いている。教室にボクと委員長以外に人の気配は無い。

烏の濡れ羽を思わせる黒髪を首まで伸ばし、前髪を七三で分け、飾り気の無いピンで留めていた。

無駄な肉は少なく引き締まった体、制服である黒いブレザーに白いブラウス、グレーのスカートを身に纏っていた。群れを統べる狼のリーダーのようだった。

心臓が大きく脈を打って、ボクの顔に大量の血液が送り込まれていた。頬が熱い、近所のおばさんにウサギみたいだと言われたボクの顔は真っ赤になっているはずだ。

「なにするんですか!」

大声で委員長に言う。委員長は不敵な笑みを浮かべていた。

「やっぱり、ディープはきついかい?」

ディープはきついですが、舌を絡められたら理性を失います。そう答えたかったけど言葉を発することが出来ない。

薄い唇の端を緩め、不敵な笑顔に少し掠れた声でボクをからかった。ボクより少し背が低く、女子にしては高い方だ。大胆不敵って

今の委員長の態度を言うんだと思う。

ここまで冷静で堂々とされると、文句を言おうにもどう言えないのか。言いたいことはあるけど上手く言葉にできない。声にならない音がボクの口から漏れていた。

「ショック療法だよ。強引だったかな」

委員長は強引だとわかっていて、完全な確信犯だ。普通に呼吸をしているつもりだったけど、喉が震えているため息が乱れ、肩が小さく震えていた。

真っ白だった脳が少しずつ動き出す。ショック療法でいきなりキスをするのか、そもそも何のためのショック療法なんだ。その瞬間、不意に幼いころの記憶が脳裏に蘇ってきた。

幼稚園の裏、人目につかない物陰でボクはその子にキスをした。そして、お嫁さんにするといった。委員長と同じ、狼のような目をした女の子だった。

その子はいつもボクの味方だった。幼稚園で男の子と喧嘩になった時も真っ先に助けてくれた。その子が男の子と喧嘩になるとボクも助けた。その子とボク二人で一つだった。大きく深呼吸をした。冷静さを取り戻すためだ。

委員長の目を直視することが出来ずに目を反らすながら盗み見る。女の子の面影が委員長と重なって来る。キスをされて気まずいのもあったけど、それ以外の気持ちもあった。幼い頃の記憶が蘇ったからかも知れない。

「……答えて」

声帯が震えていて、細く震えた声で聞こうとしたボクを制し、自信ありげに、堂々と委員長は答えた。

「わからないかい。悠太郎くん」

悠太郎くん、ボクの下の名前を呼ぶ人は、家族以外ではない。けど過去一人だけいた。

「……私をお嫁さんにするんじゃないのか？」

決定的な一言だ。子供だったときの記憶と今の記憶が完全に結び

つき、言葉となってボクの口から声になった。女の子と委員長の姿が重なる。女の子と委員長は同一人物だ。

「巴ちゃん」

委員長、いや巴ちゃんは得意げに微笑んでいた。正々堂々とした笑顔だ。ボクの全身をめぐる血液が一気に上昇し、胸が熱くなってきた。

「思い出したか、悠太郎」

何も言えずに大きくうなずいた。巴ちゃんだ。あの頃の記憶が一気に蘇ってくる。十五年前の雪の降る日、ボクと巴ちゃんは同じ日、同じ産婦人科で生まれ、同じ時を過ごした。

けど、あの日、幼稚園の卒園式の日、巴ちゃんはボクの前から姿を消した。大人の事情だと後に知ったのは大きくなってから、幼いボクが巴ちゃんと別れる理由を理解できるはずも無かった。

巴ちゃんと別れるのが嫌だった。どうすれば一緒にいられるか、結婚すればいいと思った。だからお嫁さんにすると言った。

「先にしたのは悠太郎だろ」

あのころとちっとも変わっていない、堂々とした声だ。言葉を返すことが出来ない。ボクがお嫁さんにすると言ったのだ。

言いようも無い羞恥心がボクの全身を襲う。幼いころって何でも言えるのだと思う。恥ずかしいと思いながらも、ボクは本気だった。

「答えだよ。あの日のね」

それって、お嫁さんになるということなのだろうか。疑問を聞こうと口を開こうとしたボクを制するように巴さんは言葉を続けた。

「詳しいことは、秘密」

ボクの脳が混乱している中、巴さんはあの日と同じ優しげ笑顔を浮かべていた。

「よろしくな。悠太郎」

ボクの心の中には巴ちゃんに対する疑問、懐かしさ、嬉しさ、様々な感情が入り混じっていた。何も言えずに頷いたボクに、巴ちゃんは不敵だが、嬉しそうな笑顔を浮かべて頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4641f/>

放課後

2010年10月8日15時44分発行